

		目次
『日中社会学研究』第17号		2008年3月国際シンポジウムのお知らせ P14
原稿募集のお知らせ	P1	2008年9月国際シンポジウムのお知らせ P15
第20回大会関連	P1	ソシオロジー Rooted in Life P16
第29回総会報告	P9	世界社会学機構 (IIS) 38 th 大会報告 P24
理事会報告	P11	シンポジウム報告 P26
2008年度研究集会のお知らせ	P13	事務局からのお知らせ P27

■『日中社会学研究』第17号

原稿募集のお知らせ (編集委員会)

機関誌『日中社会学研究』第17号の原稿を下記の通り募集いたします。

投稿を希望される方は、2008年12月19日(金)までに電子メールにてお申し込み下さい。登録受付の旨を返信メールにてご連絡します。

記

○投稿登録締め切り：2008年12月19日
(原稿提出締め切り：2008年2月13日)

○投稿資格

投稿する当該年度までの学会費が納入済みであることを条件とする。

○原稿登録の際の必要記入事項

- ①氏名
- ②連絡先住所、TEL、FAX、メールアドレス
- ③所属
- ④投稿予定原稿のタイトル

○投稿登録先：

陳 立行 (日本福祉大学情報社会科学部)

E-mail : chen@n-fukushi.ac.jp

c_lixing@hotmail.com

*電子メールで投稿申し込みができない方は、FAX (0569-20-0127) をご利用ください。

■第20回大会関連

日中社会学会第20回大会を終えて

東 美晴

(第20回大会実行委員・流通経済大学)

6月7日、8日、流通経済大学新松戸キャンパスに於いて、日中社会学会第20回大会を無事開催することができた。会員、非会員を含め40人を越える方々にお集まり頂き、実行委員として心から感謝するしだいである。

今大会では、7日は流通経済大学経済学部教授・原宗子先生による特別講演「中国歴代の社会変動と環境」に始まり、シンポジウム PART 1「現代中国の環境と人の移動」が行われた。8日には一般報告とミニシンポ「チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ」、シンポジウム PART 2「東アジア研究の批判的検討と今後の可能性—個性と普遍のせめぎあいから」が行われた。主催者として、それぞれに興味深い報告と白熱した議論があり、お集まり頂いた方々に多かれ少なかれインパクトを残した二日間であったと信じたい。

ところで、今大会にはシンポジウムのタイトルとしては直接、示されないメタテーマがあった。主催者として、シンポジウムを設定していく上で、ひそかに考えていたことである。それはすなわち、「中国とグローバル化する現代における移動」である。現代中国の環境変動や近代化プロジェクトに伴う環境の改変は、グローバルな市場経済に中国が参入していくことを

背景に促進されるものであり、これによって中国国内での人の移動と階層の再編が促進されていく。また、過去から現在に至る越境は、地理的領域としての中国ではなく、仮想のネーションとしての中国を浮かび上がらせる。そこにおいて揺らぐアイデンティティも、「グローバル化と移動」の一つの問題である。そして、最後のシンポジウム PART 2 は事務局提案のシンポジウムであるが、図らずもグローバル化状況下における中国研究のスタンスをめぐる議論となった。それはすなわち、中国に固有の文化性をよりグローバルに発信し認めさせていくことが社会学研究の欧米中心主義に対する重要な立場であるとするか、中国特殊論を越え、グローバルな現代社会の動向の中に中国社会を捉え研究していくことこそが必要であるとするかであった。

今大会が 20 回記念大会に相応しいものであったかどうかは参加者それぞれのご判断にゆだねるとして、中国研究に関して地域限定的な研究からグローバルな枠組みの中での研究を、という提案はできたと考えている。日中社会学会が今後も若い研究者たちにとって報告・発表の機会を与えるものであるとともに、その研究をブラッシュアップしていく上で刺激的な場であり続けることを願う。また、来年度の名古屋大学における大会の成功を心から祈念して、大会主催者の総括としたい。

■大会参加記

第 1 日：6 月 7 日（土）

開会式

会長挨拶：中村則弘（愛媛大学）

司会：首藤明和（兵庫教育大学）

松木孝文（名古屋大学）

中村則弘会長による開会挨拶では「若手の新しい活躍と参加を期待したい。小手先ではなく、どっしりと構えて研究に取り組んでほしい」と、20 回記念大会開催に臨んでの将来への展望と期待が示された。多忙な毎日の中でともすれば目先のことにとらわれがちとなる傾向があるが、そうした中でも長期的視野に立ち、真摯に研究へ取り組むことは決して忘れてはならないだろう。

特別講演「中国歴代の社会変動と環境」

講演：原 宗子（流通経済大学）

司会：根橋正一（流通経済大学）

松木孝文（名古屋大学）

20 回大会のスタートを切る記念となる講演は流通経済大学の原宗子氏による「中国歴代の社会変動と環境」である。中国における社会変動がその根底のところでは環境変化（気候変動）によって引き起こされたという仮説は非常に大胆であるが、本報告はこの仮説を歴史的資料の精緻な分析により裏付けてゆく。これまでの研究においてはともすれば気候環境を永久不変なもの前提し、現代の環境を過去に当てはめて考えがちであった。それゆえに環境などは背景に過ぎなかったが、本報告においてはまずこの前提から問い直す。長い年月の中で気候環境は確実に変動しており、人類の歴史は確か

にこの気候環境への適応の歴史として立ち頭れる側面を持つのである。

環境と社会変動の関係を示した本報告に対して会場からは主に「地球温暖化という新たな現代の局面にいかに対処するか」「ここ 100 年の近代による急激な変化にどう対処するか」という、現状への対応に関する質問が提出された。歴史を踏まえた上で今何ができるのか、というこれらの質問に対して、原氏は即効性の処方箋はないとしつつ、歴史を重ねて積み上げられた経験が現在に生かされていないことを指摘する。書物を読み解き、歴史に学び、それを生かすべく粘り強く世に伝えるという基礎的かつ地道な努力の継続がまさに求められるのである。

本報告において筆者は、長期的な歴史認識に立った分析の必要性、狭い専門分野での分析のみに固執・埋没してはならないことを再確認した。本報告はまさに開会の挨拶で述べられた「小手先ではない、どっしりとした」ものであり、新たなスタートとなる 20 回大会の記念公演にふさわしいものであろう。

シンポジウム PART 1

「現代中国の環境変動と人の移動」

司 会：浅野慎一（神戸大学）

報告者：包 智明（中央民族大学）

浜本篤史（名古屋市立大学）

根橋正一（流通経済大学）

コメンテーター：

西原和久（名古屋大学大学院）

東 美晴（流通経済大学）

長田洋司（早稲田大学）

第一日目 14：30 からは、「現代中国の環境変動と人の移動」と題してシンポジウムが開かれた。司会は神戸大学の浅野慎一先生、コメンテ

ーターが名古屋大学の西原和久先生、流通経済大学の東先生で、3 人の報告者の発表がなされた。

まず、中央民族大学の包智明先生から、「中国内モンゴルにおける砂漠化と生態移民」という報告がなされた。居住地域の生態環境の悪化に伴う他地域への移住である生態移民という問題について、広義・狭義の定義づけを示した後、「政府関与の有無」、「移住形式」、「移住後の生業」といった基準によって生態移民の様々なタイプを紹介した。次に、この生態移民という問題に関する先行的研究を紹介した上で、包先生ご自身が進められている内モンゴルでの調査について紹介がなされた。内モンゴルでは、砂漠化の進行に伴う対策の一つとして、自治区全地域でこの生態移民の政策が実施されているという。そして、調査では政府部門から出されている文献資料や統計資料、さらに実際に生態移民が実施された 9 つの村での聞き取り調査とアンケート調査を中心としてまとめられ、今回の報告では、発表時間の都合から簡単な概要だけが説明された。

続いて、名古屋市立大学の浜本篤史先生より、「中国・山峡ダム開発と立ち退き移転者～山峡ダム住民移転はいかなる社会的文脈の下、遂行されようとしているのか～」という報告がなされた。報告では、山峡ダム開発にかかわる歴史、工事計画とそれに伴う大量の住民移転について説明がなされた後、その住民移転を進めるための政府による「開発型住民移転政策」の概要、その破綻と転換の現状について紹介がなされた。そして、そうした背景を踏まえ、住民移転に様々な問題が発生するにもかかわらず、「なぜ中国ではこのような巨大事業の遂行が可能であるのか」について、社会的側面との関連から検討することを目的として三峡ダムの事例を中心として報告がなされた。同事例は、移転がなされた後に問題が発生する「事後問題

化型」として位置づけられ、豊かになりたい住民たちは移転を受け入れるものの、移転後に予想とは違う困難な生活環境に直面してしまう。しかし、噴出する住民の不満は中央政府には向かわず、地方政府に対して向けられているという。浜本先生はその原因について、成長イデオロギーの共有による現政権への信任と出稼ぎの日常化による住民の期待感と、中央政府が巧妙に責任を回避している社会構造によるものであると指摘した。

最後に、流通経済大学の根橋正和先生により「中国におけるレジャー空間の生産とエコツーリズム 雲南省香格里拉・碧塔海自然生態観光を事例として」という報告がなされた。報告は、「我々の最も身近な環境体験である観光が自然に対してかなりきつい圧力をかけている」という問題を出発点として、現在、中国が市場経済の中で観光産業振興を目指す中で注目している生態観光（エコツーリズム）について、開発の進む雲南省の事例から、「ツーリズム空間の生産」や「場所の消費」という視点で生態観光について考察することを目的とした。まず、ツーリズム空間そのものにかかわる生産と消費について、ルフェーブルやアリーの理論を使いながら説明がなされた。次に、中国全体のエコツーリズムに関連した空間生産のあり方について、「風景名勝区」、「森林公園」、「自然保護区」という分類を紹介し、その上で新時代のレジャー空間、ツーリズム空間として生産されている雲南省の事例である碧塔海のエコツーリズムの形成について「物理的空間」、「思考された空間」、「生きられる空間」という三つの視点から説明がなされた。特に中国では市場経済社会および新たな産業として注目される中、このツーリズム空間が住民と自然にとって「生きられる空間」であるかどうかという視点から考察する必要があるとまとめた。

報告に続いて、コメンテーターからの意見が

出された。まず、名古屋大学の西原先生からの包先生へのコメント。

・生態移民という言葉について日本ではまだ定着していないので、定義とともに この言葉の意味合いについて

・生態環境には社会環境も含まれるのか？
・ブラジルの移民、満蒙開拓団などは移民として言えるのか？

・政府の将来的な政策の欠如について
次に、浜本先生へのコメント。

・不満の実像について教えてほしい
・三峡ダムがグローバルな視点の中でどのように考えられるのか？

そして、根橋先生へのコメント。

・J．アリーを用いる場合は移動の問題、定住型社会から移動型社会への転換という文脈での可能性について

続いて流通経済大学の東先生からの包先生へのコメント。

・自発的移民の範囲は広いのでは？
・強制的移民について、戸籍制度の問題があるのでは？

次に、浜本先生へのコメント。

・都市に移転される人は戸籍は変わるのか？

さらに、フロアからもいくつかのコメントが出された。まず、浜本先生へは、「国家主導開発モデルを維持できるメカニズムはどこにあるのか？」、「中央はよくて地方は悪いという考え方はアジア的カテゴリーで片付けられるか？」といったコメントが出された。次に、根橋先生へは、「香格拉の事例はエコツーリズムの事例としてちゃんとしていないのではないか？」、「エコツーリズムの実態に関して」といった質問が出された。

最後に、以上を踏まえて各報告者からコメントが出された。

まず、包先生。西原先生へは、「生態移民は日本でも使われている。」、「生態環境の悪化と

社会環境の悪化は関連している。」「政府の将来性の欠如の事例は多く、農業開発区の水不足の問題などがある。」「国を超えた生態移民は政府のプロジェクトの範囲内ではない。」「地方政府の役割は多いが、政府官僚の利益を代表し、住民を代表していない。」「生態移民のプロジェクトは経済発展のプロジェクトになってしまう。」と各質問に丁寧に応答された。

次に、浜本先生。西原先生へは、「地方政府に訴える場合は問題化し、上級政府に訴える場合は地方への不満、お上へのすがるような態度である。」「住民移転は国家プロジェクトで失敗は許されない。」「民族の問題として捉えなくてもよいのではないか。」「戸籍については、都市戸籍への転換の事例はある。」と回答した。そして、フロアへは、「経済優先を是正する転換は、開発経済成長を目指す触媒として働く。「和谐社会」「小康社会」など。」「中央政府への批判に向かう可能性は潜在的にはある。」というように回答された。

最後に、根橋先生も、「移動と環境というテーマの中で、エコツーリズムは重要である。」など、一つ一つ丁寧に応答された。

第2日：6月8日（日）

一般自由報告

司 会：長田洋司（早稲田大学）

報告者：

松木孝文（名古屋大学大学院）

鄭 南（中部学院大学）・曹 陽（撫順社会科学学院）

斎藤あつ子（早稲田大学大学院）

呉 偉明（香港中文大学）

宮内紀靖（瀋陽師範大学）

長田洋司（早稲田大学）

第二日目は、9時30分より一般自由報告が開かれた。5人の報告者による研究発表がなされた。

まず、名古屋大学の松木先生から「日本の地方都市における中国人技術研修生・実習生—四国瀬戸内海沿岸地域の実地調査に基づいて」という報告がなされた。1993年より発足した外国人研修・技能実習制度で日本で労働に従事する中国人の増大を背景として、全国一律の制度の下にありながら、研修生制度にまつわる「良い話」と「悪い話」が混在する現象をどのように理解していくべきかについて、実際の調査事例を使って報告がなされた。調査は愛媛県および香川県の瀬戸内海沿岸地域を事例としており、報告では、7ヵ所の協同組合での結果が紹介された。そして、受け入れ機関側の厳しい管理に伴う負の側面が強調されることによって「悪い話」が顕在化し、賃金以外の良好な待遇の側面が強調されることによって「良い話」が顕在化する可能性について指摘した。最後に、地域社会における外国人研修生・実習生の労働力以外の位置づけについて考える必要について示唆した。フロアからは、報告に出た「良い話」、「悪い話」が誰にとってのものであるのかといった質問が出された。

続いて、中部学院大学の鄭南先生が代表して「社区住民の生活と家族・親族ネットワーク—撫順市での住民調査を通して」という報告を行った。報告は、国有企業改革による大量の失業者が発生、未だ問題の多い社会保障改革、地方分権の進行に伴う地域格差の顕在化といった中国における社会背景を見ながら、「住民の生活状況はどのようになっているのか」、「階層的グループに属する住民の生活に影響を与える要因はどのように異なるか」、「社会的ネットワーク、とくに家族・親族間のつながりや援助が当人の生活にどのような影響を与えている

のか」といった問題に関し、国有企業の集中する撫順市で行われた住民調査のデータを基に分析した。調査は確率比率抽出法によって選ばれた30の場所を対象に行われ、「生活満足度の規定要因」、「家族・親族ネットワークと互助」「家族・親族によるインフォーマル・サポートと単位・社区によるフォーマル・サポートの関係」、「フォーマル・サポート、インフォーマル・サポートと生活満足度の関係」といった項目に関して分析が行われた。そして最後にまとめとして、撫順では階層的地位の分化と意識の分化が大きくなっていること、大量に生み出されている失業者や不安定就業者たちにとって、インフォーマル・サポートがソーシャルキャピタルとして重要な意味をもつようになっていること、しかしその一方で、インフォーマル・サポートもコミュニティサポートも住民の生活度を高める要素にまではなっておらず限界があることなどについて指摘した。フロアからは、インフォーマル・サポートとフォーマル・サポートの補完性などについて質問が出された。

次に、早稲田大学の斎藤あつ子先生により『『廃都』に隠された国民国家誕生の思想—「me」としのオクシデンタリズム』という報告がなされた。報告では、文学作品を利用して社会変革（中国人の精神構造）を行おうとし、文学作品の中に自身が考える「me」という「一般化された他者」を描くことによって、その「一般化された他者」を読者と共有しようとする作家による中国の小説を題材としてなされた。そして、「一般化された他者」を「中国的人間の原型」として見る前に、その前提となっている「一般化された他者」を「西洋的人間の原型」として見た場合に、作者が「一般化された他者」をどのように認識しているのかを示すことを目的とした。具体的には、1993年に北京で出版され、中国全土で空前のブームを巻き起こし、

当局によって発禁処分となった『廃都』という小説を取り上げ、その中で展開される物語と『旧約聖書』を比較しながら、精神の病を基軸に、記号的分析を行った。そしてまとめとして、「知=力」であり、西洋のような力、西洋に対抗する力を獲得するために西洋に学ぶとするサイドのオクシデンタリズムに対して、「me」としてのオクシデンタリズムは「知=(積極的な)反省、自省」であり、中国の社会問題を解決するためには中国(東洋)の知だけでは足りず、自分たちの社会問題を改善するために西洋に学ぶことであると指摘した。フロアからは、物語の比較対象などについて質問が出された。

続いて、香港中文大学の呉偉明先生により『『貞子』が『キョンシー』にめぐりあって—日本ホラー映画要素の香港化について』という報告がなされた。報告では、日本のホラー映画が、近年の香港ホラー映画に与えた衝撃を通して、文化のグローバル化におけるアジア映画の他国による共同制作、およびハイブリッド化などの趨勢を考察し、その背景にある文化的意義について分析がなされた。特に日本のホラー映画が、香港をはじめとしたアジア地域において一大ブームを巻き起こしたきっかけは、「ザ・リング」であり、香港では1999年に香港映画史上で最高の売り上げを記録する日本映画となった。その後、この日本のホラー映画の撮影技術を含めた様々な要素が、香港のホラー映画において頻繁に模倣されるようになり、それは正に現地ホラー映画との融合という形をとっての現地化を果たしたという。

最後に、瀋陽師範学院の宮内紀靖先生から、「中国の2008年現在—国家社会主義と民主主義をめぐる諸問題【オリンピック関係】」という報告がなされた。報告では、北京オリンピック開催に関連して噴出している様々な問題に対して、中国の社会構造と構造を見るパースペクティブを提示することを目的とし、いくつか

のキーワードに分けて、論じられた。先ず、「社会主義的資本主義[社会主義市場経済]」については、最も早くに改良された資本主義の一例であるとし、政府は格差是正の調和社会論へと導こうとしているにもかかわらず、経済成長の持続と速度を重視して、格差是正と汚職撲滅は二の次となり社会不安を招いているため、この格差是正の努力により民主主義化に向かって社会主義社会構造を維持・強化が可能であるとする。また、「民主主義と自由」の項目では、エティック概念から見た西欧近代的な自然権としての抽象的な「自由」の観念とは異なるエミク概念からの「自由」の観念について説明し、この二つの自由の間の乖離を極力小さくして、西欧諸国の指摘にも謙虚に耳を傾けるべきだと論じた。フロアからは、エティックとエミクをどう関連付けるかといった質問が出された。

ミニシンポ「チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ」

コーディネーター：永野 武（松山大学）

報告者：

穉山 新（筑波大学）

「中国におけるエスニックネーションの起源」

南 誠（京都大学）

「中国帰国者」の歴史／社会形成」

松木孝文（名古屋大学）

2 日目のミニシンポジウムにおいては最初に穉山新会員と南誠会員による基調報告が行われた。

穉山 新会員（筑波大学）

「中国におけるエスニックネーションの起源」

穉山会員による第一報告は「中国革命の父」とされる孫文が何故領域性を持つ「国家」という枠組みではなく「民族」を運動の理念として

採用したのかを明らかにするものである。本報告においては孫文の海外留学の軌跡を追い、それぞれの場の歴史的背景とそこで培われた関係性とが孫文の思想を形成していく様がリアルに描かれた。そうして孫文らの「民族主義」が単に「漢族」のエスニックなアイデンティティに基づくものではなく、「中等社会」などの階層意識と絡まり合った結果であること、その前提がグローバルな人的移動等の社会変動により準備されたことが指摘された。本報告で示された、越境者を担い手とする国家枠組の形成は本シンポジウムにおける重要な論点の一つであろう。

南 誠会員（京都大学）

「中国帰国者」の歴史／社会形成」

南会員による第二報告は、「中国帰国者」の歴史社会的形成を国民化、エスニシティ、コミュニティの視点から論じるものである。本報告は国民を分かち様々な「境界」に着目しており、その変化とともに「中国帰国者」が変化を余儀なくされてきた様が描かれつつも、決してそれだけでは終わらない、定められた「境界」へ抵抗する彼等の力強さも指摘されている。一度形成された「境界」は単に制度だけではなく、現実を生きる人々の越境の試みにより絶えず揺れ動くのである。

本シンポジウムにおいては、様々な論点が提出されたが、とりわけ印象的だったのが、越境者であるがゆえに人々の持つ創造性と強かさについてであった。越境者は越境前・越境後のいずれの国にも還元され切らない新たな文化を形成する。そして越境者がそのことを自らのアイデンティティとして自覚したときには非常にアクティブな存在となり、新たな国家の枠組を形成する担い手になることさえある。本シンポジウムにおける議論においては、今日の社会変動を理解する上での越境者の重要性を再

認識すると同時に、豊富な先行事例を歴史の中に求めることができることを強く印象付けられた。

シンポジウム PART 2

「東アジア研究の批判的検討と今後の可能性 ——個性と普遍のせめぎあいから」

基調報告：王 向華（香港大学）

：中村則弘（愛媛大学）

討論者（五十音順）

東 美晴（流通経済大学）

石井健一（筑波大学）

呉 偉明（香港中文大学）

黒田由彦（名古屋大学）

陳 立行（日本福祉大学）

根橋正一（流通経済大学）

司 会：首藤明和（兵庫教育大学）

基調報告1 王 向華氏（香港大学）

王氏の報告は西洋の東アジア研究が持つ限界を指摘するものである。従来の西洋発の東アジア研究は東アジアを西洋の思考のパターンに当てはめたものであり、東アジアをあるがままに理解することからは遠くかけ離れているという。氏は、様々の事例を挙げながら西洋の思考パターンにはまらない東アジアの独自性を呈示する。例えば西洋において対極にあると信じられる「友情」「計算」という二つの概念すら東アジアにおいては矛盾なく融合する。そうした東西の違いを指摘したうえで報告の末尾では「自分自身の西洋のバイアスを自覚する」ことの重要性が指摘された。

基調報告2 中村 則弘氏（愛媛大学）

続く第2報告の冒頭においては西洋の枠組みでは「割り切れない」東アジア社会のエピソードをひきつつ、第1報告で指摘された東アジ

ア社会の特徴が再確認された。しかし同時に指摘されたのは東アジアで観察されるその種の「割り切れなさ」、あるいは「生き生きとした現実」は東アジアのみに留まらず西洋にもまた存在するという事実である。これまで信じられてきた西洋の姿は決して現実全てを表しておらず、むしろ豊かな現実を削ぎ落した理想像である。その理想像に引きずられるあまりに東アジアに対する認識だけではなく西洋に対する認識をも誤らせてきたのである。東アジア的な思考様式を掘り起こすことは西洋を再認識する上でも欠かせない作業と言えよう。

報告後の討論では多くの論点が提出された。現実の認識に関わる点としては、西洋・東洋という括りの内部にも多様な社会が存在すること、すでに西洋においても現実を切り捨ててきたことへの反省が存在すること等が指摘された。東洋的な思考様式の必要性はすでに西洋でも認識されつつあるのだ。以上を共通理解とした上で次の課題が俎上にのぼる。すなわち、東洋的な思考様式を西洋の理解にも活用できる分析枠組みとする方法である。この点に関しても実践法から道徳論に至るまで活発な討論がなされたが、問題の大きさに対して時間はあまりにも限られており、具体的なイメージを形成するには至らなかった。しかし取り組むべき課題が豊富に示されたことは大きな収穫であろう。20回の節目を迎えた本大会において東アジア研究の意義、および取り組むべき課題が真摯に問い直されたことは、日中社会学会の将来にとって重要な意味を持つに違いない。

■第 29 回総会報告

事務局（首藤明和）

開催日：2008年6月7日（土）

場 所：流通経済大学

中村会長からの開会の挨拶に続き、永野武会員が議長に選出され、議事に入りました。

※残額内訳

郵便局定期預金	300,000
郵便振替口座	44,880
郵便局普通口座	270,622
現金	39,6111

第 1 号議案 2007 年度事業報告

以下の各項目について、事務局および各担当理事より報告がなされました。

1. 研究大会の開催 07.6.2～3（日本福祉大学）
2. 機関誌『日中社会学研究』第 15 号編集発行（300 部） 07.10
3. 『21 世紀東アジア社会学』創刊号の編集（300 部）
4. 「ニューズレター」発行 3 回 50 号～52 号 07.05 07.11 08.03
5. 理事会開催 3 回 07.6.2 07.6.3 07.12.9
6. ホームページの運営
7. 会員概況 入会 7 名 退会 2 名
現会員 188 名（一般 104, 学生 84）
8. 機関誌編集委員会報告
9. 研究委員会報告 冬の研究集会
07.12.8～9
10. 中日社会学会との交流推進

第 2 号議案 2007 年度決算報告

会計担当理事より、以下の資料にもとづき、

I. 一般会計報告、II. 第 19 回大会・第 28 回総会特別会計について、報告がなされました（備考については略してあります）。

I. 一般会計報告

収入総額	1,252,283
支出総額	597,170

差し引き残額（次年度繰越金）655,113

収入の部

費目	予算額	決算額	増減額
前年度繰越金	551,570	551,570	0
会費収入	650,000	683,000	33,000
機関誌販売	25,000	17,000	▲8,000
雑収入	1,000	713	▲287
合計	1,227,570	1,252,283	24,713

支出の部

費目	予算額	決算額	残額
機関誌制作費	500,000	394,800	105,200
ワーキングペーパー集制作費	80,000	0	80,000
学会ニュース経費	20,000	0	20,000
事業費	5,000	0	5,000
事務費	70,000	44,070	25,930
通信費	100,000	83,300	16,700
会議費	50,000	0	50,000
大会補助	50,000	75,000	▲25,000
予備費	352,570	0	352,570
合計	1,227,570	597,170	630,400

II. 第 18 回大会・第 27 回総会特別会計

日時：2007年6月2日・3日

会場：日本福祉大学

大会会計担当者：陳 立行

収入総額	232,500
支出総額	232,500
残額	0

収入の部	
大会参加費	89,000
懇親会費	143,500
計	232,500

支出の部	
懇親会費	157,000
事務費	2,809
アルバイト料	24,107
シンポ吊看板代	42,000
飲食料費	6,584
合計	232,500

上記の通り報告申し上げます

2008年5月10日

日中社会学会事務局

会計担当理事 唐 燕霞 印

江口伸吾 印

第3号議案 2007年度会計監査報告

監査より、以下の資料について監査結果について報告がなされました。

決算報告および会計監査報告を受け、2007年度決算が賛成多数で承認されました。

2007年度監査報告

帳簿、預金証書、支出証拠書などを監査した結果、いずれも適正に処理されていたことを報告します。

2008年5月26日

監査 富田 和広 印

鍾 家新 印

第4号議案 2008年度事業計画案

以下の各項目について、事務局および各担当理事より事業計画案の説明がなされました。質

疑応答を経て、賛成多数により承認されました。

1. 研究大会の開催 名古屋大学開催
2. 機関誌『日中社会学研究』
第16号編集発行、第17号編集
3. 『21世紀東アジア社会学』
創刊号編集発行、第2号編集
4. 「ニューズレター」発行 3回
5. 研究会開催 2～3回
6. 理事会開催 2～3回
7. ホームページの運営
 - ・コンテンツ充実
 - ・会員業績一覧の作成
 - ・会員による研究活動の広報
8. 中日社会学会との交流
 - ・中国での研究集会開催
 - ・中国でのワークショップ開催
 - ・中国の研究機関・大学との研究交流
9. Critical East Asian Studies
Workshop (香港大学主催) との連携
10. 中長期構想の策定
 - 研究活動の一層の充実に向けて
 - ・小中高大連携
 - ・各エリアでの研究会の開催等

第5号議案 2008年度予算案

事務局から説明がなされ、質疑応答を経て賛成多数で承認されました。

収入の部

予算額	
前年度繰越金	655,113
会費収入	650,000
機関誌販売	25,000
雑収入	1,000
合計	1,331,113

支出の部

	予算額
『日中社会学研究』制作費	500,000
『21世紀東アジア社会学』制作費	
	150,000
学会ニュース経費	20,000
事業費	5,000
事務費	70,000
通信費	100,000
会議費	50,000
大会補助	50,000
＊第20回大会への補助	
予備費	386,113
合計	1,331,113

第6号議案

次年度大会・総会の開催地・開催校について

理事会原案として名古屋大学が示され、賛成多数で承認されました。

第7号議案 四川大地震に対する日中社会学会としての募金活動について

理事会原案として、大会開催期間中に日中社会学会として募金活動を行うこと、義捐金は陳捷理事を通じて、中日社会学会事務局長の羅紅光氏に渡すことが示され、賛成多数で承認されました。

■理事会報告

事務局（首藤明和）

2008年度第1回理事会報告

開催日：2008年6月7日（土）

場 所：流通経済大学

審議事項

1. 第28回総会議案書について

事務局の総会議案書（案）を基に審議し、同

日開催の総会議案書とすることが合意された。

2. 『日中社会学研究』投稿規程の改定について

事務局案に基づき、『日中社会学研究』投稿規程の改定について審議がなされ、以下のように改定することが決定した。

（1）『日中社会学研究』投稿規程で、[投稿資格]に関する第1条を改定する。

第1条（新）

「投稿が可能なのは、日中社会学会会員および日中社会学研究編集委員会が依頼した人とする。会員の場合、投稿する当該年度までの学会費が納入済みであることを条件とする。」

第1条（旧）

「本誌への投稿資格は、本会会員とする。」

（2）『日中社会学研究』投稿規程のなかで、[申し込みと提出]に関する第12条を改定する。

第12条（新）

「投稿原稿は E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は、Ms-word あるいは PDF とする。やむを得ず、この投稿方法が不可能な場合は、完成原稿とコピー3部、およびフロッピー・ディスクを編集委員会に送付する。フロッピー・ディスクの送付にあたっては、使用したパソコン・ワープロにかかわるメーカー、機種およびソフトの名称を明記する。また、フロッピー・ディスクには、原稿作成に用いたパソコン・ワープロのソフトによるファイル以外に、MS-DOS のテキスト形式のものも同時に記憶させておく。」

第12条（旧）

「投稿にあたって は完成原稿とコピー3部、およびフロッピー・ディスクを編集委員会に送付する。フロッピー・ディスクの送付にあたっては、使用したパソコン・ワープロにかかわ

るメーカー、機種およびソフトの名称を明記する。また、フロッピー・ディスクには、原稿作成に用いたパソコン・ワープロのソフトによるファイル以外に、MS-DOS のテキスト形式のものも同時に記憶させておく。手書き原稿を投
稿する場合は、事務局と事前に協議することとする。」

(3)『日中社会学研究』投稿規程のなかで、[執筆要領]に関する第 10 条第 1 項、及び、第 2 項を改定する。

第 10 条第 1 項・第 2 項 (新)

「1) 本文の該当する箇所に挿入箇所を指定する。」

「2) 写真は E-mail の添付ファイルとして送付する。それが不可能な場合は、写真は印画紙に焼き付けたものを提出する。」

第 10 条第 1 項・第 2 項 (旧)

「1) 本文の該当する箇所の欄外に挿入箇所を朱書きして指定する。」

「2) 写真は印画紙に焼き付けたものを添付する。」

(4)『日中社会学研究』投稿規程のなかで、[原稿の採否]に関する第 13 条を改定する。

第 13 条 (新)

「投稿論文は複数の審査員の審査結果により、編集委員会が掲載の可否を決定する。編集委員会と投稿者の連絡方法は、編集委員会の指示に従うこと。」

第 13 条 (旧)

「投稿論文は複数の審査員の審査結果により、編集委員会が掲載の可否を決定する。」

(5)『日中社会学研究』投稿規程のなかで、[付記]に関して、新たに第 3 項を設ける。

[付記]第 3 項の新設

「3. 本規定は、2008 年 6 月 8 日より実施する。」

3. 四川大地震に対する日中社会学会としての募金活動について

日中社会学会として、会員を対象に四川大地震に対する募金活動を行うこと、集められた義捐金は中日社会学会へ渡し、中国側の窓口になっていただくこと、日中社会学会の募金活動は陳捷理事を担当者とし、事務局がサポートすること、本日の総会后、および、懇親会において募金活動を行うことが決められた。

4. 世界社会学会大会組織委員会への委員候補者推薦について

陳立行理事(日本福祉大学)を推薦することが決められた。

5. Critical East Asian Studies Workshop (香港大学主催) との連携について

日中社会学会として、Critical East Asian Studies Workshop (香港大主催) と積極的に連携して活動してゆくことが確認された。

6. 中日社会学会との研究交流——中国でのワークショップの開催および中国の研究機関・大学との協力について

中日社会学会との研究交流を積極的に推進すること、具体的には、中国で研究会やワークショップ等を開催し、中国の研究機関・大学との協力体制を築いていくことが確認された。

7. 入会者・退会者について

1 名の入会、2 名の退会が承認された。

8. 次期以降の大会開催校について

開催校について意見交換が行われた。

日中社会学会・2008年度冬季研究集会のお知らせ

研究プロジェクト担当理事
浅野慎一（神戸大学）・根橋正一（流通経済大学）

2008年度・冬季研究集会を下記の日程で開催いたします。会場は日中社会学会にふさわしく中華会館。神戸南京町にも近く、神戸華僑の歴史や文化の一端にも触れていただければ幸いです。参加費は無料（一般公開）です。多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

○会場・日時

・日 時：12月13日（土）：13:00～18:00

・会 場：中華会館

〒650-0011 神戸市中央区下山手通2丁目13番9号

TEL:078-392-2711

（JR・阪神元町駅東口より徒歩8分、JR・阪急三ノ宮駅より徒歩10分）

・地 図：神戸中華会館HPをご覧ください

<http://www.zhonghua-huiguan.com/kaikan/map.html>



○プログラム

アラタムバートル（神戸大学）

「中国における多民族社会の現状——少数民族教育からのアプローチ」

坂部晶子（島根県立大学）

「植民地経験のライフヒストリーに関して」

田 洪涛（名古屋大学）

「中国から見た研修・技能実習制度——遼寧省大連周辺地域における帰国後の研修生・技能実習生を対象とした調査から」

南 誠（日本学術振興会特別研究員（PD）・国立民族学博物館外来研究員）

「アイデンティティ・パフォーマンスの社会学的研究——『中国残留日本人』の名称と語りを手掛りに」

中村則弘（愛媛大学）「世界における中国社会の研究動向：国際研究集会の状況から」

中央民族大学・日中社会学会共催

2008 年度春季・国際学術シンポジウム開催のお知らせ

「中国研究の可能性と課題——新しい社会構想の実験場として」

事務局・首藤明和（兵庫教育大学）

中国・中央民族大学（民族学与社会学学院）と日中社会学会の共催で国際学術シンポジウムを開催します。日中社会学会としましては、海外で初の研究集会となります。

○開催日時

- ・2009年3月27日-28日

○開催場所

- ・中央民族大学（中国・北京）

○テーマ

- ・「中国研究の可能性と課題」について、環境、福祉、民族、コミュニティ、家族、文化、宗教、移動、情報、産業など、多方面から考察・議論いたします。

○費用について

- ・包智明教授（中央民族大学）より、シンポジウム開催期間中の会場費・人件費・会場飲料費・雑費及び日本からの参加者（10名以内）の宿泊代・食事代を、中国国家プロジェクト（研究代表・包智明教授）より負担するとのお申し出をいただきました。また、同時通訳が必要な場合には、通訳代も負担するとおっしゃってくださっています。
- ・なお、交通費は、参加者の自己負担となります。

○シンポジウムの成果発表について

- ・『21世紀東アジア社会学』第2号（2009年6月発行）及び『日中社会学研究』第17号（2009年10月発行）での掲載（査読有り）を予定しています。

○報告者の募集（2009年2月15日まで）

- ・報告者を募集いたします。下記の項目について、事務局（首藤）までご連絡ください。

- ・氏名
- ・所属
- ・報告題目（仮題でもかまいません）
- ・報告要旨（1200字程度）

今後、本シンポジウムの詳細については、ニューズレターや学会HPにて広報します。また、ご不明な点などございましたら、事務局（首藤）までお問い合わせください。

首都経済貿易大学主催・日中社会学会後援

2009 年度秋季・国際学術シンポジウム開催のお知らせ

「経済と社会の新たな発展モデルを求めて——中日の比較の視点から」

理事・陳捷（愛媛大学）

事務局・首藤明和（兵庫教育大学）

首都経済貿易大学主催・日中社会学会後援により、2009 年 9 月、北京の首都経済貿易大学において、国際学術シンポジウムを開催します。

○主催・後援

- ・首都経済貿易大学（金融学院）主催
- ・日中社会学会後援

○開催日時

- ・2009 年 9 月 12 日

○開催場所

- ・首都经济贸易大学（中国・北京）

○シンポジウムの内容

- ・日中の比較の視点から、「経済と社会」の新たな発展モデルを探究する。
具体的なトピックとして、
 - ・経済と金融
 - ・市民社会
 - ・グローバリゼーションのなかの経済と社会
 - ・移動（ひと・もの・情報等）

○論文提出の期日

- ・2009 年 6 月 30 日

○報告者の募集（若干名）（2009 年 5 月 31 日まで）

- ・報告者を若干名、募集いたします。下記の項目について、事務局（首藤）までご連絡ください。

- ・氏名
- ・所属
- ・報告題目（仮題でもかまいません）
- ・報告要旨（1200 字程度）

今後、本シンポジウムの詳細については、ニューズレターや学会 HP にて広報します。
また、ご不明な点などございましたら、事務局（首藤）までお問い合わせください。

■ ソシオロジー Rooted in Life

● 回族自治県から見る中国社会学 —— 清真寺と回族の高齢者 ——

出和暁子（中国人民大学博士課程）

ニューズレター第 49 号、第 50 号掲載の「回族自治県から見る中国社会学」に引き続き、第三弾として、今回は、当県の清真寺に関わるいくつかの内容と信仰とともにある回族の高齢者の生活と長寿の関係について取り上げたい。

ここでは、まず先に、清真寺における礼拝のこと、「封齋」（ラマダーン）や「開齋」のこと、そして、コーランを講釈する「阿訇」について簡単に紹介したい。



写真 1：当県で一番大きい「清真寺」

当県には回族が多く住む村が 15 あまりあると言う。その各村々にはいずれも約 500 年の歴史を持つ「清真寺」（イスラム寺院）がある。各村にあることで、村民にとって、とりわけ、高齢者にとっては自転車や徒歩で礼拝に行けるため、非常に便利である。

清真寺では、毎日 5 回の礼拝が行われる（写真 2 を参照。礼拝名称は、アラビア語音を漢字表記してある）。『コーラン』には、必ず「洗

大、小浄」しなければならないと書かれてある。そして、毎回、礼拝前には、ムスリムは必ず体の各部分（手、足、顔、口、鼻）を三回ずつ「冲洗」（おきよめ）してから正殿に入らなければならないという掟がある。

礼拝は日の出前の「晨礼（帮目答）」から始まり、40～50 分間、大声でコーランを詠み、礼拝が行われる。そして、午後からの「晌礼（撤失尼）」、「輔礼（低蓋雷）」と続く。この二つの礼拝の間隔は短いため、その間、おきよめを壊すような行為をしてなければ、「輔礼」前に再度、清める必要はない。日没後に「昏礼（沙目）」があり、そして一日の最後は「肖礼（虎伏灘）」で締め括られる。



写真 2：礼拝時間お知らせ

ただし、現代社会においては、礼拝に行くのは、総体的に高齢者が中心で、若者は少ない。たとえ回族自治県に住む農村の回族の若者で、イスラム教に対して堅信的ではあっても、生産活動の参加、外での商売といった仕事の忙しさ、また、家庭内の負担などといった原因により、毎日の礼拝に行くことが難しい。そのため、毎週金曜にある「主麻日」にだけ清真寺に礼拝に行く者も多い。そして、

この「主麻日」に何度も礼拝することは、たとえ、メッカに行く経済的条件がない者でも、メッカに行ったと同じように見なされると言う。また、当県には、昔、学校でコーランを学ぶ専門授業があったというが、今は、廃止されてしまった。そのため、村の清真寺では、夏休みや冬休みといった長期休暇を利用し、一日、二時間の「経学班」を開講し、無料で子供たちにコーランの初歩的な知識を学ぶ機会を提供している。

先日、10月初めに、ムスリムにとって、一年で最も大きな祝祭日「開齋節」があった。「開齋節」の日までの約一ヶ月間は、「封齋」（ラマダーン）期間となる。「封齋」は、コーランに定められてあり、神が要求することで、また、その意志を守り通すことが重要であると考へ、さらに、空腹で食べる物に困っている貧しい人々に対して援助するという意味をもつと言う。「封齋」期間、本来、男子は12歳以上、女子は9歳以上であれば、日の出から日の入前まで、飲食してはならないとコーランで定められている。しかし、実行しているのは信仰心が敬虔な高齢者が中心で、若者は少ない。

ちょうどこの「封齋」期間に、私は当県に滞在し、夜中、日の出前に起床し、日の出前に飲食をすませ、日の入りまで一切飲食せず「封齋」する回族の長輩（上の世代）を実際に見てきたが、年配の人の身体にはかなり応えるだろうと感じた。そして、この時期、「封齋」する長輩を労い（睡眠や飲食が良好ではないため）、長輩に尊敬を示す意味で、晚辈（下の世代）が「封齋」する長輩を訪ね、お茶や食べ物などを贈る習慣がある。これは、回族の一つの礼節である。「封齋」があけた「開齋節」の日は、各家庭で手作りの「油香」と呼ばれる回族の代表的な食べ物（揚げパンのようなもの）を隣近所や親戚に配り祝った。

次に、各村の清真寺に常住する「阿訇」（コーランを講釈する者）について簡単に紹介したい。一つの清真寺には一人の「阿訇」がいる。その任期は三年を一期とし、交代制である。しかし、「阿訇」が村民から慕われ、村民が任期継続を望んだ場合は、継続されることもあるらしい。さて、その「阿訇」になるためには、二つの道がある。一つは、中国イスラム教経学院（北京市では宣武区牛街にある）で本科生（四年制）を卒業後、学校側から行き先を分配され「阿訇」となる道である。これは一般的に、都市の清真寺の「阿訇」となることが多い。もう一つは、農村の清真寺での伝統的方法であり、十代から「阿訇」につき、師弟（「海礼凡」と呼ばれる）として学ぶというものである。この場合、30本のコーラン全てを暗記し、詠めて、かつ講釈できることが求められる。そのためには、最低でも十年以上はかかるらしい。したがって、回族の高齢者の間では、コーランの学びの奥深さは、都市型の「阿訇」よりも農村の伝統型の「阿訇」のほうが深いと考えている者が多い。また、都市の「阿訇」は毎月有給で、かつ、退職規定年齢があるのに対し、農村の「阿訇」にはない。したがって、前者は養老金と三險（基本養老保険、医療保険、失業保険）が享受できるが、後者はない。彼らの生活費はすべて村民からの寄付による。通常、「阿訇」は数人の「海礼凡」と呼ばれる師弟を持つ。当県の大きな清真寺の場合は、約六人、小さな清真寺の場合は、二～三人いる。「海礼凡」はすべて男性であり、彼らは十代の時、中国の各地（当県においては山東省や山西省など）から、それぞれの当地の「郷老」（よく礼拝に行く者）同士の紹介によって各清真寺に送られると言う。

以上、ここまでは、清真寺における礼拝のこと、「封齋」や「開齋」のこと、そして、コ

ーランを講釈する「阿訇」のことについて簡単に紹介してきた。次に、信仰とともにある回族の高齢者の生活と長寿との関係について考えてみたい。

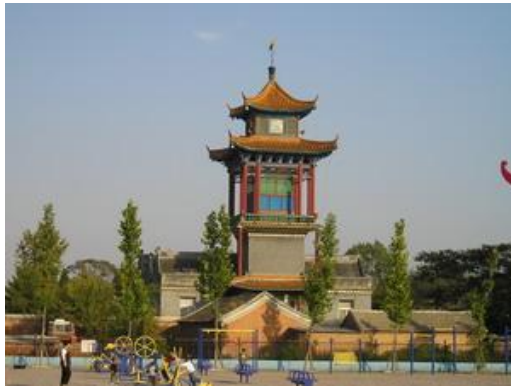
そもそも、今回、回族の高齢者を取り上げようと思ったのは、一年あまり前の当県の村に住むA氏との出会いにある。彼は今年、80歳を迎える。私のA氏に対する印象は「健康的、性格が朗らかで温かい、懐が広い」だった。後で聞けば、若い頃に師匠について「摔跤（中国式レスリング）をしていたようで、足腰の強さや体格の良さはそこから来ているものなのだろう。また、脳梗塞で倒れ、いまも軽い半身不随が残る妻（78歳）の身の回りの世話を10年あまりし続けている。以前、A氏が「妻は、長年、半身不随で思うように身体を動かすことができないけど、自分で行くことは、少しずつ、壁につたいながら歩くようにしている。以前と同じというわけにはいかないけど、精神的にタフで強い忍耐力を持っているから、徐々に良くなっている」と語り、妻を見守る温かさを感じた。このように、高齢でありながらも、妻の介護を長年続け、でも、悲痛な雰囲気か漂っていないA氏という人物に関心を持ったのである。そして、A氏を通じて、当県に住む回族の高齢者の生活が、今まで私が北京で見ると異なる点があると感じ、興味を持った所以である（もちろん、都市生活と農村生活という違いもあるけれど）。

A氏は、解放前の若い時、単身で天津へ行き、個人で「回民小吃」のお店を開いたと言う。解放後、「清真飲食」を取り扱う単位（職場）に勤務し、60歳の退職までは天津を中心に生活していた。退職してから、妻や子供がいる故郷の当県の村に戻った。彼は農村戸籍であるものの、天津で労働者として働いていた経歴があるため、現在、毎月の養老金と医

療保険がある（ちなみに妻は農村戸籍で無職のためこれらの保障はない）。現在は、農村の平屋の家で、妻と二人暮らしであるが、三人の子供（息子一人と娘二人）はいずれも当県に住んでおり、よく両親を訪ねている。これが、精神的な支えにもなっていると思われる。そんなA氏は、ほぼ毎日、自宅から目と鼻の先にある清真寺に礼拝に行く。行けない場合も、自宅で礼拝をする。そして、今年、彼も妻も健康上大きな問題がなかったため、二人揃って、一ヶ月間の「封齋」を続けた。また、ほぼ毎日、村の清真寺の「阿訇」と「海礼凡」のために食事を届けたと言う。このように、二人は、敬虔なムスリムである。本来は、このA氏を中心にインタビューをしたかったが、今回は時間の制約もあり、上記の話の一部はその親戚であるB氏（A氏の義理の弟）に聞いた。

B氏（65歳）もまた、当県に住み、今年の「封齋」を一ヶ月続けた。自身の礼拝について次のように語っている。「毎日、決まった時間に礼拝に出かけ、正殿で、大きな声でコーランを詠むことは、喉や気管支を鍛えることにも繋がっている。それに、礼拝は、立ち上がったったり、跪いたりといった規律ある動作を繰り返すが、これは一種のゆったりと気孔するようなもの」と表現する。そして、精神を清めるという点では、「一旦、正殿に入るとそこはまさしく“静”の世界で、“榮喜を養う”場所でもあるし、何も考えずに、身体と靈魂を浄化できる」し、さらに、「回族の高齢者たちは、礼拝という活動する場所があるので、充実した生活がおくれていいと漢族の高齢者に羨ましがられたことがある」と語る。

写真 3 : 村の健康広場の傍に聳え立つ清真寺
の「望月楼」



以上のように、回族の高齢者の清真寺における礼拝や彼らのもつ敬虔な信仰心が、彼らの生活に重要な影響を与えるファクターとなっているのではないかと。そして、回族の高齢者は一般的に、長寿であるとも言われる。この点については、上述の「身体や精神のおきよめ」のほかに、「飲食習慣」との関係も強調する。つまり、彼らは自分たちが口にする物は清潔であって、瀉血していないものは食べないし、動物の血も食べない。回族は血を汚れたものであると考えるからだ。豚肉のことを彼らは「黒肉」と呼び、脂肪が多く、体に悪いと見なし、自然から生まれた草を食べる草食動物の牛や羊、そして、鶏、鴨などは、清潔で体に良いものとする。

残念ながら、回族の長寿と敬虔な信仰心、礼拝生活、飲食習慣について因果関係を立証できる統計的データはないが、先日、中国老年学会が発表した「中国十大長寿ランキング」で興味深い結果が見られた。それによれば、全国における最長者は男女ともに新疆ウイグル族であった（女性 121 歳、男性 118 歳）。回族ではないものの、同じイスラム教を信仰し、礼拝を通しての生活習慣や飲食習慣などにおいては共通点があるだろう。当学会は「長寿

の秘訣」を以下のように分析している。「心理状態が穏やかで、自然の成り行きに任せ、強く求めず、高望みせず、恨まないこと」、「規律ある生活をし、労働を好み、質素な食事をする」、「善良で、人に親切で思いやりがあり、人助けを好む」、「家庭円満で、子供が親孝行であること」、「喧騒から遠く離れ、静かな環境で部屋は簡素であること」。ここでは、ムスリムとしての彼らの信仰とともにある生活に関しては触れていない。しかし、これらの長寿の秘訣は、A 氏夫妻の信仰とともにある生活や B 氏が語る礼拝において感じる様々な体験、またコーランの教義とも一致する点が多々あることは確かである。

（当県の清真寺に関する内容や資料については、当県に住む B 氏の協力を得たものである。）

●2008 年夏 韓国訪問記

大上博右

（兵庫県立神戸甲北高等学校教諭）

はじめに

今年（2008 年）の 8 月、勤務校の校長や先生方とラグビー部の生徒 26 人を引率し韓国に短い旅をした。たまたま滞在期間が韓国にとっての独立記念、私たちにとっては終戦記念にあたる日とその前後であった。日本の中学校の新学習指導要領で竹島（韓国では独島と呼ぶ）の領有権主張が明記された事に端を発する反日気運が高まっている時期でもあった。

ソウル大学附属高校にて

お昼少し前に仁川空港に着き、空港の巨大

さと快適さに強い印象を受けた。近接する大阪府と兵庫県に3つの小さな空港が分散する日本とは対照的である。利用客が少なく閑散としているのは日本と同様であった。空港から1時間ほどでソウル大学付属高等学校に到着した。校門には我々を歓迎する垂れ幕が用意され先生方や生徒が拍手で出迎えてくれた。

生徒の合同練習を見下ろす校長室で金校長先生および幹部クラスの先生方と会議を行った。その後70代後半と見受けられる卒業生の方二人を紹介していただいた。お二人の完璧な日本語は日本の植民地統治時代の学校教育で身につけられたものである。「名前も日本風に変えさせられた。でも担任の先生は生徒を可愛がってくれた。」懐かしさと複雑さの入り交じった思い出話に私たちは時の経つのを忘れた。

時の流れは無情にも過去の思い出とは無頓着に前へ進む。外に一步出ればざらざらした真夏の太陽と試合に熱中する若者の歓声、「先生には良い思い出を持っている」決して我々をとがめなかったお二人の言葉が胸を刺した。試合の後では韓国のお母さん達の手作りの豪華な食事を囲んで教員も生徒も大歓迎を受けた。

伝統と近代

私は年休を利用しての旅行だったので一日は自由行動で過ごした。韓国は初めてであったが一人で地下鉄に乗った。最初に訪れた昌徳宮はユネスコ世界遺産に登録されている。15世紀にさかのぼる建物もあれば室内が洋式に改造された後にも使用された建物もあり、数百年の歴史が併存していた。昌徳宮から宋廟への道沿いには古い建物の街並みがある。夏なので扉や窓が開け放たれ、主婦が洗濯や料理をしていた。高層ビルが建ち並ぶ近代都市ソウルで初めて見た伝統的な生活風景であ

った。

再び地下鉄に乗り西大門にある日本統治時代の刑務所史蹟博物館を訪れた。日本統治下での韓国の人の苦しみを深くまた身近に考えさせられた。日本人である私にとっては頭を垂れるひとときであった。隣接する独立公園では8月15日を前に日本の植民地支配からの解放を記念する式典の準備が進められていた。

地下鉄を乗り換え梨花女子大の付属キリスト教会を訪れた。この大学は日本統治時代に神社参拝を強要される苦難の歴史を味わっている。1886年に設立され、大韓民国で最も伝統のある女子大であり、世界で最初に工学部を設置した近代的な女子大である。

グローバル 코리아とは

「日本の方ですか」大学街の喫茶店で日本語版の News Week を読んでいると梨花女子大の学生が英語で話しかけてきた。短時間だが韓国経済について話をした。経済専攻ではないそうだが「ウォンと株価が同時安になると心配だ」と専門的な意見を述べる。英語専攻ではないそうだが綺麗な英語を話す。韓国では日本より以上に英語教育に熱心である。李明博大統領の「グローバル 코리아」計画では英語教育強化が謳われ、一時は高校の授業の多くを英語で行うという案まで提案された。子供を英米に留学させるために母親が付き添い、ソウルには父親だけが残される。このような家庭をソウルの「アヒル」とよぶのだ。アヒルは子育てに熱心なことで知られる一と聞いたことがある。

急速にグローバル化に対応しつつある韓国だが地下鉄の駅では一人の例外を除き英語が通じなかったので乗り換えに苦労した。しかし英語が通じる人材養成だけをグローバル化への対応と考えるべきではないであろう。たとえば韓国の地下鉄の駅が数字の番号で表示

されているのは海外からの旅行者にとっては大変に助けとなる。身近で人に優しいグローバル 코리아も大切だと思う。帰国後に読んだ本の中で駅を数字の番号で表示するアイデアは、韓国から学んで日本でも導入されたとの記載があった。

忘れられない親切

帰り道に迷ってコンビニでアルバイトの女の子に尋ねたところ大変に心配してくれた。「わたしは英語ができないからごめんね」と片言の英語で言いつつ店の仕事を放り出して地下鉄の駅まで連れて行ってくれた。彼女の親切はおそらく一生忘れられないであろう。二度と会うことのない外国人それも日本人の私のために・・・ホテルに帰ってもしばらくは彼女のことを考えていた。グローバル化に対応する英語やITなどの高度な能力も大切だが、その国を初めて訪れる外国人が最も印象を受けるのはこのような親切なのだと思う。

おわりに

帰りの仁川空港は海外に出発する韓国人の人たちで混雑していた。到着時とあまりに違う様子に驚いた。巨大で近代的な空港に伝統的な帽子を被った年配の紳士と携帯電話で話し続ける若者の姿があった。夏休みで海外旅行に出かける人々の様子は日本と同じである。

すでに一人あたり国民所得が15000ドルを超えた韓国は、今後は先進国として日本と同様な悩みを抱え対応に苦慮するであろう。両国が知恵を出し合い共通する問題の解決に当たる事も出来るはずである。

私はソウルの刑務所跡で独立運動に参加し縛られた韓国人の写真に胸を打たれた。私たちはいつまでも忘れるべきでない。深く反省すべきである。しかし「いつまでも過去に縛られて未来の関係まで諦めるべきではない。」

これは1919年に起きた反日独立運動の記念日である3・1節の演説での李明博大統領の言葉である。

仁川を離陸した飛行機は宍道湖の上空を通過し瀬戸大橋の上で向きを変え、淡路島の大観音の上から高度を下げ着陸態勢に入った。すべてがはっきりと見える快晴の日であった。

●法廷通訳を通して 香港社会を垣間見る

宮崎紀子
(香港中文大学日本研究学科
Part-time Instructor)

非常勤講師といえば、フリーランスの身。それを利用していろいろな仕事をしている。新聞の香港通信員や日本語教師養成コースの講師などである。最近、新たに加わったのは、法廷通訳だ。面接に行ったら、なぜか採用されてしまったのである。

採用後のある日、法廷通訳を担当している政府の部門から連絡があり、事前講習に来て下さいとの事だった。香港の裁判の何たるかや法廷通訳の心得を学ぶものである。今回はその時の模様をお伝えしたいと思う。

6月某日、天気は雨期の香港らしく土砂降りの雨。私は湾仔にある政府ビルへ向かった。1階にはスターバックスがあり、法曹関係者と思われる人がコーヒーを飲んでいる。部屋に案内されてみると、私の他にも受講者が女性ばかり数人いて、聞けば、客家語や、インドの方言担当だと言う。

講義は予定の時間ちょうどに始まった。午前は9時半から12時半まで、午後は2時5分から4時まで、ランチタイム以外は休憩も

なく行われた。

香港の法体系は英国式を採用している。1997年の中国返還後も50年間は根本的な法体系は変更されない取り決めがある。なので、旧英国領の南アフリカなどで、法律を学んだ人も、そのまま香港で弁護士ができるとのこと。

また、裁判官には永久職と非永久職があり、永久職は香港人だけが、非永久職には、英国及びオーストラリア、ニュージーランドなど旧英国領の国の者だけが就ける。

裁判の際の宣誓文だが、キリスト教徒とその他では文面が違ふ。キリスト教徒向けには、「全能の神に誓って」という文言が盛り込まれている。

裁判官への呼びかけも、裁判所のランクによって異なる。例えば高等法院の場合と雇用関係を扱う下位の裁判所の場合とでは呼びかけに丁寧度の差があり、呼び分けなくてはならない。

外国語での、しかも法律という専門外の講義は結構ハードだった。しかし、この講義がなかったら、到底務まらなかったと、実際に法廷で通訳をしてみても感じた。そして、この仕事は、裁判で人間のネガティブな面を見ることがあり、人間及び人間社会についていろいろ考えさせられるとも思った。

英国式の法体系を採用しながら、新界の村では、財産相続法など、清時代の法律が今なおおきているというのも興味深い。この仕事を通して、香港社会についての理解を深めていけたらと考えている。

●私の夏休み

陳 鳳（神戸学院大学非常勤講師）

毎年夏休みが近づきますと、周りの中国人の先生たちは、いつ中国に帰るのか、どのぐらい滞在するのか、どの旅行会社はサービスがよく、航空チケットが安いのかなど話題で盛り上がり、帰る準備にかかります。私も例外ではありません。この時期になるとなぜか帰りたい気持ちが高まり、いま考えると日本に来て20年近くなりますが、帰らない年は一度もありませんでしたし、場合によっては二度、三度帰る年もありました。最初は子どもの中国語の勉強のためでしたが、1999年から研究調査のために帰ることになり、帰った後も殆ど調査現場に行っているため、家族、友人や同級生らとゆっくり話す時間は殆どありませんでした。今年オリンピックの北京開催ゆえに、その期間の航空チケット料金が高騰し、北京のホテル代も3倍以上に跳ね上がったため、多くの先生はオリンピック開催期間を避けて帰ることにし、中には帰らない先生もいました。わたしも今年の夏休みこそ日本にいてこれまでの調査内容を整理し、論文にしなければならぬと思っていましたが、夏休みに入ると中国に帰りたい気持ちが抑えきれなくなり、結局帰ることにしました。しかも、オリンピックの雰囲気を楽しもうと、開催期間中に帰ったのでした。

北京到着後、まず、北京空港の新ターミナルの大きさと外観を彩る赤い柱に驚かされました。現代的な建物と中国風の赤のコントラストがこんなに綺麗だとは、本当に想像に絶するものがありました。もう少しゆっくり見たかったのですが、飛行機の乗換えの時間が迫ってきたので、別のターミナルに行き、実

家のある某市に帰りました。滞在の間、家族、友人、同級生らにゆっくり会うことができました。

久しぶりに会った友人と同級生たちの一番の話題はやはりオリンピックでした。同級生の中にオリンピックの開幕式を見に行った人もいて、みんなから現場にいた時の感想を聞かれ、とても感動したと誇らしげに話していました。オリンピックの話が一段落すると、自然と子どもの話題に変わりました。だれの子どもがよく勉強ができるとか、だれの子どもがどこそこの有名校に入ったとか、みんな子育ての最中ですので、話にも熱が入ります。みんな教育熱心な親だと感じました。

楽しい時間があっという間に過ぎ、日本に戻ってくる日が近づいてきました。今年もいつもの通り、日本に戻る前日は北京で一泊しました。いつも利用していたホテルがオリンピック関係者で満室だったため、仕方なく別のホテルにしましたが、意外と環境もよく、交通の便も（燕莎商業圏内）よく、サービスもよく、料金も安かったので（今回は例外で1000元ぐらいでしたが、普段は300元ぐらいだそうです）、今後もここを利用しようと思いました。ただ、空港から近いので、タクシーの運転手に、空港で長い時間待ったのに、こんな近くで儲げがないとぶつぶついわれたことがすこし不愉快に感じました。でも北京の綺麗な空気を吸って、青空を見ると、その不愉快な気持ちもどこかに飛んでしまいました。友人の案内で「鳥の巣」にも見に行きました。周囲を見学しに、あるいは試合を見にきた人が多くいて、熱気に溢れていました。私もほんの少しですが、オリンピックの雰囲気を楽しむことができました。

日本に帰る24日、北京空港で偶然にも、野球の日本チームの選手たちとばったり会い、しかも同じシャトルに乗って、出国審査に向

かいました。自分の周りは全部選手たちでした。メダルが取れなかったこともあり、みんな無言でした。話しかけようとも思いましたが、結局その勇気がありませんでした。家に着いてテレビをつけると、先ほど自分の周りにいた選手たちがテレビに出ていました。それを見て、これらの選手たちに二度と会うことはないのだろうなと思いました。選手たちに出会ったことを夏休みの思い出の一つとして知人たちに話したところ、みんなから、特に野球ファンの皆さんから羨ましがられました。

今年の帰国期間は短かったのですが、久しぶりの休暇でもあり、またいろんな意味で「収穫」もあって、とてもよかったです。みなさんの夏休みはいかがだったでしょうか。

■世界社会学機構（IIS）38th大会報告

社会主義が人類に一体何を残したか

陳 立行（日本福祉大学）

世界社会学機構（IIS）の第38回大会が6月26-30日、ブダペストにある中欧大学で開催されました。今回のIISでは、地理的な原因かもしれませんが、東欧の前社会主義諸国にかかわる研究発表が目立ちました。

私は飛行機でウィーンに行き、電車でブダペストに入りました。オーストリアとハンガリーは第2次世界大戦前まで、産業の発達もカトリックを中心とした宗教文化も非常に似ていました。しかし、30年間の異なる社会体制により、ウィーンからブダペストまで電車でわずか3時間の距離ですが、2つの国の違いが恐ろしいほど大きいように感じました。

ハンガリーは社会主義を体制的に収束させただけでなく、イデオロギー的にも徹底的な清算を行いました。ブダペストでは最もにぎやかな *andrássy* 通りの中心部では、ユニークなテロ博物館があります。この建物は、第二次世界大戦期にはハンガリー極右政党「矢十字党」の本部で、社会主義時代には国家秘密警察 AOV の本部となり、地下には政治犯を拘束する秘密牢獄があります。博物館は主に三つの内容によって構成されています。まず第二次世界大戦のファシスのテロ、それから1956年のソ連による武力鎮圧のテロ、三番目には社会主義時代の民衆動員と秘密警察によるテロ活動です。そこで、社会主義を象徴する赤い五星がファシスを象徴した黒い十字と一っしょに並んでいたのを見た時、言葉では表せない複雑な感情が湧いてきました。

ハンガリーは30年前に社会主義体制を終え、民主主義と市場経済体制を実施し始めました。しかし、社会主義は社会生活の添加剤

のように、社会のすべての領域で溶解して、すべての人の社会行為の中にしみ込んでいくように感じました。ウィーンとブダペストの古い建物には、昔日のオーストリア・ハンガリー帝国の雄姿が依然として覗われますが、この2つの都市で生活する人を観察すれば、ブダペストの人々の表情と仕事の態度は、オーストリアの人々と大きく異なり、むしろ20世紀末の中国人とよく似ています。

ウィーンにいたときいつも地元の人に道を尋ねました。彼らはとても温和で、親切で、英語が通じないとき、ジェスチャーで丁寧に説明してくれる人もいました。しかし、ブダペストの駅に着いた際、最初に感じたのが、人々の顔と表情から窺われる他人に対する懐疑と警戒感でした。毎日、頻繁に耳にさわる警笛の音にも驚きました。地下鉄の駅や本屋など多くのところでほこりが積もっていましたが、従業員たちのチャットをしている姿をよく見かけました。また、サービス態度も10年前の中国と似ています。ブダペストの地下鉄は百年前に世界ではじめて開通したことで有名です。ところが、駅のエスカレーターの速さに驚きました。高齢者や障害者は言うまでもなく、私が乗ったときでも、肝っ玉の震えるほどに怖かったです。それほど速いのに事故がないことが信じられません。なぜ調整しないのかと不思議でたまりませんでした。地下鉄の駅では、切符の自動販売機を設ける駅もあれば、窓口で切符を購入する駅もあります。あるとき窓口で切符を買いにいった際、販売員がおらず窓をたたくと、その人が文句を言いながら非常に不愉快そうな顔をして戻ってきました。似たような表情はあちこちで見られました。国際学会のコーヒープレークでは、コーヒのおかわりをする時、その店員がコーヒコップを投げるような態度で渡したので、コーヒを飲む気持ちも悪くなり

ました。

さらにびっくりしたのは、中国のレストランの支配人とチャットした際、ハンガリーの政府官僚の腐敗は中国よりも何倍もひどいという話を聞いたときです。私は民主主義の体制をすでに導入したのではないかと問いました。彼は、どの制度と関係なく、権力を手に入れば、誰でも自分のために利益を得ることに一生懸命だと言っていました。彼の話聞いて、周りをよく観察しました。私が滞在したのは普通のホテルではなく、インターネットを通じて予約した高層マンションの一室です。中心部にあってとても便利で、自炊できるキッチンもあります。この部屋を管理する人から、この建物はもともと政府機関の建物で、現在個人所有になったことを聞きました。そのオーナーはハンガリー人で6室を所有し、現在はイタリアに住んでいます。オーナーの昔の職業については教えてくれませんが、このオーナーが転換期に金持ちになったことは間違いありません。

ごく短い滞在ではありましたが、さまざまな見聞は、社会主義は人類に何をもたらしたのかを思索する機会を再び与えてくれました。

1. プロレタリア独裁を維持する体制は人々に警戒心と嘘をつく習慣をもたらす

K・マルクスは理性主義を前提として、能力に応じて働き、需要に応じて分配する社会主義の公有制の理論を構築しました。しかし、レーニンは公有制を実現するために革命を必要とし、この体制を維持するにはプロレタリア独裁を必要とする理論を提起しました。プロレタリア独裁的社会主義体制の維持が、東ヨーロッパの各国で秘密警察によって統制されました。ブダペストのテロ博物館ではAOV秘密警察の歴代指導者の写真が展示されてい

ます。高質な洋服、学究ぶりの眼鏡、顔立ちも整っています。ところが、何か悪魔のような顔が共通していると、一緒に行った人はみんな言っていました。彼らは元々悪魔のような性格の持主だから秘密警察のトップになれたのか、或いは、秘密警察のトップになってから徐々に悪魔のような顔になったのか、皆は冗談めかしながら言い合いました。おそらく後者の可能性が大きいです。目が心の窓、彼らは毎日闘争したり、迫害したりすることで、自分もいつか同じ目にあう恐れがあることを知っています。そうした環境の中で徐々に悪魔のような顔になったのでしょうか。

東欧と違い、アジアの社会主義の各国では、秘密警察ではなく、都市の「単位」と農村の「生産隊」に設置された共産党支部の力によって「階級闘争」の理念が徹底され、プロレタリア独裁的社会主義体制が維持されました。その時代では、中国でも他人に対して本音を語ることで階級闘争の対象になり、「右派分子」にされ、苦難の人生を経験した人は何百万人もいました。文化革命中、友達や家族に本音を言って摘発され、「反革命分子」にされて命さえも失った人は少なくありませんでした。この社会環境の中では、他人に対する警戒心や嘘をいうことが、人々の生存のための本能になるのでしょうか。現在、中国では「階級闘争」の理念がすでに放棄されましたが、その厳しい時代に、人を迫害したり、迫害されたりしたことを多く経験した40代以上の人々には、暗い記憶が心の奥深くに刻まれ、彼らの顔には温和で親切な表情がまだ見えないわけです。

2. 社会主義体制は東ヨーロッパとアジアでは意味合いが違う

東ヨーロッパの各国は第二次世界大戦中フ

アシズムの侵略と統治を受けましたが、戦前は植民地にはされていませんでした。彼らにとって社会主義体制は、第二次世界大戦後の社会主義陣営と資本主義陣営の対立の結果だと思われています。社会主義体制は、ソ連から武力によってまで彼らに無理やり押しつけられたものでした。その時の社会主義政権は、ただ一部のソ連に追随する左翼の政治勢力の選択によるものであり、多くの国民の選択ではありません。そうした背景により、ハンガリーでは、社会主義時期の秘密警察やヒトラーと並んでソ連の武力鎮圧を、民族全体に対するテロと位置づけています。そのため、社会主義体制が崩壊した後に、イデオロギーと民族感情の上で、社会主義に対する清算を行うことが当然の帰結となりました。

しかし、アジアの歴史的背景は違います。第二次世界大戦前、中国、朝鮮、ベトナムは、すべて植民地支配を経験し、第二次世界大戦中、これらの国の共産党は植民者と戦いました。ここから創立した社会主義の政権は民族解放の結果だと捉えられています。特に中国共産党が50年代末にソ連と決裂して以降、社会主義体制は中国の民族の選択という共通認識が強くなりました。この意味で今後中国の政治体制はいかなる方向へ改革しても、イデオロギー的に社会主義を清算することはあり得ません。社会主義革命の中で、すでに民族独立と民族解放とが解け合っているのです。

3. 公有財産分割が腐敗の根源

ハンガリーでは社会主義体制が崩壊した後に、民主選挙と三権分立の民主主義の制度を導入しました。しかし腐敗の問題は依然として深刻です。三権分立の民主主義の体制は腐敗根絶に最も有効な体制と思われていますが、

ハンガリーの現実を見ると、それは甘すぎる考えだと思います。全国民所有の社会主義体制の市場経済への転換にあたっては、必ず、公有財産を私有化する過程を経なければなりません。公有財産を私有化する過程では、社会主義体制の下で形成した価値が崩壊します。伝統価値の復活と新しい価値の再建は短い期間では確立できず、社会全体は道徳崩壊と価値危機の状態に陥ります。この過程では、多くの利益を貪る人が、罪悪感よりはむしろ達成感を得る傾向にあり、一方、利益を得られない人も機会があれば、公有財産の分割を決して見逃さないように一生懸命に努力します。その結果、構造的に三権分立の法体系を構築するのは難しくないので、もし立法、司法、行政に関わる人に対して十分な道徳と価値による拘束がないならば、公有財産の分割を通じて、かえって利益集団のために働くような事態も生じ得ます。この意味において、社会主義から市場経済への転換過程では、三権分立の民主主義体制など如何なる政治体制改革も、公有財産の分割と私有化に伴う腐敗を根治することはできないと思われます。

■シンポジウム「中国農村・農民問題と食糧危機：中国農村の現実から考える」報告

松木孝文（名古屋大学）

2008年7月21日、李昌平氏を迎え、日中社会学会が後援に加わったシンポジウム「中国農村・農民問題と食糧危機：中国農村の現実から考える」が行われました（主催：中国農村問題シンポジウム実行委員会、共催：名古屋大学環境学研究科、後援：日中社会学会・中日新聞・尾張旭市）。最初に、李昌平氏（オックスファム香港顧問・河北大学中国郷

村建設研究中心主任研究員)が基調講演を行い、その後、田中重好氏(名古屋大学環境学研究科教授)と首藤明和氏(兵庫教育大学准教授)を討論者に、黒田由彦氏(名古屋大学環境学研究科准教授)を司会者として、活発なディスカッションが行われました。

李昌平プロフィール：湖北省で1980年代から90年代にかけて農村幹部をつとめ、農村・農民問題の深刻さを痛感。2000年に、農村農民をめぐる理不尽な処遇を訴える書簡を当

時の朱鎔基首相にあてて送る。これがきっかけとなり、中央は同地域に調査団を派遣。同時に全国の農村・農民・農業問題へのとりくみが本格化する。その後広州で仕事をしたのち、北京で雑誌の記者、編集者などを経て、現在はオックスファム香港中国部顧問。河北大学中国郷村建設研究中心主任研究員。今回は初の来日。日本での訳書に李昌平著『中国農村崩壊：農民が田を捨てる時』吉田富夫監訳、北村稔、周俊訳、NHK出版、2004年

■事務局からのお知らせ

□四川大地震への義捐金について

2008年6月7-8日に開催されました日中社会学会大会におきまして、会員の皆様から四川大地震・被災者の方々へ義金として寄せられた70,000円は、陳捷先生(理事)を通じて、中日社会学会事務局長の羅紅光先生(中国社会科学院)にお渡ししました(6月10日)。中日社会学会より感謝の言葉を戴いております。皆様より頂戴したご厚志に対しまして、改めて御礼申し上げます。

□新入会員

○中村 圭

所属：同志社大学大学院社会学研究科

アドレス：

研究領域：中国都市部における人材の転職
「跳槽」

○村井香織

所属：東京大学大学院人文社会系研究科

アドレス：

研究領域：国際社会学・人口社会学・地域研究

○大上博右

所属：兵庫県立神戸甲北高等学校

アドレス：

研究領域：宗教社会学

○奈倉京子

所属：廈門大学人文学院歴史学系

アドレス：

研究領域：東南中国と東アジア・東南アジアとのかかわり・帰国華僑・華南華僑・中国移民

○王 武雲
所属：岐阜市立女子短期大学国際文化
学科
アドレス：
研究領域：ジェンダー、家族社会学

○傅 琳琳
所属：大阪市立大学文学研究科
アドレス：
研究領域：都市・コミュニティ・社区

○馬 麗華
所属：東京大学大学院教育学研究科
アドレス：
研究領域：生涯教育

○田 洪涛
所属：名古屋大学大学院
アドレス：
研究領域：中国人研修生・技能実習生

□編集後記

このたびのニューズレターは、多くの方々からのご寄稿により、たいへん充実した内容となりました。ありがとうございました。

いよいよ日中社会学会の研究集会が、年度ごとの学会事業として、海外で開催されることとなります。中国現地の研究者との交流機会が増えることで、研究の発展に繋がるのではないかと期待しております。記事のなかでご案内のとおり、報告者の公募をいたしております。皆様の積極的なご参加をお待ちしています。

また、2003年度より、毎年学会事業として開催してきました国内での研究集会も、今年

で第6回を数えるに至りました。ご案内にありますように、今年は12月13日、神戸の「中華会館」で開催します。中国研究における若手研究者の問題関心や研究状況を知るうえで、最良の機会でもあります。是非、数多くの方々にご参加いただき、議論を深めていただきたく存じます（首藤明和）。

日中社会学会ニューズレター No.54

発行：日中社会学会事務局

〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1
兵庫教育大学・首藤明和研究室
info@japan-china-sociology.org
shuto@hyogo-u.ac.jp
tel・fax: 0795-44-2165（研究室直通）

（事務局・業務補佐）：吉岡智子
nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp
tel・fax:089-927-9366

日中社会学会・郵便口座
口座記号番号：00140-9-161801
加入者名：日中社会学会

日中社会学会・公式 HP
<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日：2008年11月